

カール・レーヴィットと昭和初期の日本

——「コスモス」と「風土」を巡って——

福 島 揚

● 序

カール・レーヴィット (Karl Löwith) がナチズムの迫害から逃れる亡命のさなかに、九鬼周造の招聘を受けて来日し、神戸港に降り立ったのは一九三六年十一月のことである (MLD-111)。レーヴィットは東北帝大に赴任し、これ以後一九四一年初頭にアメリカへ再び亡命するまでの約四年間、仙台に滞在する。

ドイツからイタリアへ亡命し、そしてそれに続く「はじめての東方への旅」(MLD-112)は、レーヴィットにとって何よりも、自らを迫害したヨーロッパ世界とは全く異なる世界の存在を告げ知らせる体験となった。キリスト教世界とは無縁の自然の事象への信仰が息づいていることは彼を驚かせ、また西田幾多郎の「無」の哲学との接触は、やはりキリスト教世界にはない日本人

の人間観世界観を彼に知らしめた。

一方この滞日の年月は、同時代の和辻哲郎の倫理学との暗黙の緊張関係を孕んだ時期でもあったと推測される。レーヴィットが一九二八年に発表した処女作『共同人の役割における個人 (Das Individuum in der Rolle des Mitmenschen)』は、『和辻倫理学と、人間存在の間主体的「間柄 (Verhältnis)」的性格』、『ヘルソナ』「役割」的性格に注目している点において通底していることを、昨年度の比較思想学会で発表させて頂いた。¹⁾しかし、戦前戦後と一貫して人間学的倫理学の構想を続けた和辻とは対照的に、レーヴィットはこの日本滞在をひとつの契機として、自らの処女作をあたかも自己批判するかのようになり、人間学的には把握しえない「世界」、「コスモス」の探求へと向かっていく。

本稿は和辻とレーヴィットとの比較研究の続編にあたる。前回

は、両者の人間学的倫理学、人間存在論としての側面に注目したが、今回は、和辻「風土」論とレーヴィットの「世界」「コスモス」論に焦点を移動し、再度比較研究を試みたい。

● 1 日本の自己愛への批判・

ヨーロッパの自己批判

レーヴィットは一九二八年の『共同人の役割における個人』において、「自然（環境世界）と社会（共同世界）に対して個人の独立を發展せしめるに至った」(RM-2) 近代哲学を批判し、「人間の個人が『人格』、言葉の本来の意味でのベルソナという在り方をしている個人である、つまり本来一定の共同世界的な『役割』を担って」存在していることを示そうと試みた(RM-VIII~IX)。

ドイツでの刊行の翌一九二九年十一月、日本においては清水幾太郎による『共同人』の書評「カアル・レウイト『共在人としての個人』」が発表されている。また、一九三〇年にはレーヴィットの論文「L・フォイエルバッハとドイツ古典哲学の終結」(V)の抄録が、『思想』誌に掲載され、これ以降もレーヴィットの論文の邦訳は同誌等に紹介されていく。レーヴィット自身も回想しているが(MLD-106)、彼自身の来日に先立って、『共同人』等はある程度の関心を持って昭和初期の日本の思想界に受容されていたことが窺われる。人間存在を他者との「間柄 (Verhältnis)」

において捉えようとしたレーヴィットの着想は、ちょうど時を同じくして人間学的倫理学の体系構想を進めていた和辻哲郎によってもいち早く注目されている。和辻が著作の中でレーヴィットに言及するのは一九三七年の『倫理学』の「序論」においてのみ(20-29-32)であるが、両者は此岸の日常的共同世界における人と人の関係性に注目し、共同世界の環境世界に対する根源性を主張している点では深く共通していた。

しかし、「共同人の役割における個人」というタイトルがいみじくも示すように、レーヴィット自身は「個人」と「共同世界」とを一貫して緊張関係のもとに捉えようとしており、和辻倫理学等を中心とする昭和の人間学とは根本的に異なる方向性を抱えていた。『共同人』執筆と、それに続く彼のナチズム体験は、こうした方向性をより鮮明にさせ、レーヴィットは歴史的共同世界を根源的な世界と見做す自らの当初の世界観を自己批判する方向へ必然的に向かって行く。

レーヴィットは日本滞在末期とアメリカカ亡命(一九四一―五二年)中、そしてドイツ帰国(一九五二年)後、日本での体験報告や幾つかの日本文化論を執筆している。また、多くの論文の中で、自らの日本滞在体験が重要な意味を持つものだったことにはしばしば触れている。レーヴィットは離日間際に、『思想』誌に論文「ヨーロッパのニヒリズム」を三回にわたって発表しているが、

その最終回に付された「日本の読者に寄せる後記」(Ⅱ)は、第二次大戦前夜の日本の精神的状況に対して、極めて辛辣な批判を語ったものである。レーヴィットはこの「後記」の冒頭において、「あらゆる領域で今や再び『自身になろうと欲する、すなわち混じり気なく日本的になろうとし、よそ者の影響をできるだけ減少させようとする』。国粹主義的気運に警鐘を鳴らしている。「ヨーロッパから学び取り引き継いだ進歩が、反ヨーロッパ的目的のため的手段として使われるのだから、日本の西洋に対する関係はすべて必然的に分裂したものになり、両義的なものとなり、西洋文明は称賛され、そして嫌悪される。西洋文明は『唯物論的』であるという主張がしばしば聞かれるが、そこでは自分自身においては『観念論』が前提とされているのである。大概の日本人の西洋に対する関係において聞きのがされない言外の響きは、ヨーロッパに対する拒絶である。」(532~3) また、レーヴィットは日本人がヨーロッパから受け取ったものは「中国文化の受容時のように、宗教的、学問的、道徳的な基礎ではなくて、第一に我々の物質文明」であり、「人間本来の生活、人間の感受様式と思考様式、人間の風習と評価は、物質文明の隣にあつて、相対的に無変化のまま存在し続け」、ヨーロッパの「精神」と「その精神の歴史」は受け入れられなかったと指摘する(534~5)。

その「精神」とは、レーヴィットによれば「批判的精神」、即ち「区別すること、比較すること、決定することを心得ている」

ような精神であり、「国家と自然、神と人間、教義と偏見」といった現存するすべてのものを「捉えて問い質し、懷疑して研究する」ような精神の有り様であるという。

この精神の担い手とされるのは、きわめて強靱な「個人」である。「何に関与しようとも分かつたれない、一つの『個人』(Individuum)』である一人の人間のみが、『自分と神、自己と世界、自己と民族あるいは国家を、自分と隣人を、自己と己の『憎むべき自己』(バスカル)を、真理と虚偽を、JaとNeinとをそのように鋭く、確かに区別し、決定することができる」(538)とレーヴィットは述べる。ここでは、処女作において提示されていた「共同人の役割における個人」の精神が改めて語られていると見てよい。

こうした「批判的精神」と対照的なものは、「境界をばやけさせる気分による生活、人間と自然の世界との関係における、感情にのみ基礎を置いているがゆえに対立のない統一、両親と家族と国家における、批判をぬぎにした絆、自分を明示せず、あらわにしないこと、論理的帰結の回避、人間との交際における妥協、一般に通用する習俗の因習的な遵守、仲介の間接的な組織等」である(538~9)。

しかし、これほど手厳しく「日本的自己愛の批判」を語ったレーヴィットは、同時にはつきりと「ヨーロッパの自己批判」へも向かい、世界観の根本的な転換を体験することになる。一九六〇

年に発表された「東洋と西洋の差異に関する覚書」(Ⅱ)は、こうした転換を回想しつつ語ったもののひとつであるといつてよい。

冒頭においてレーヴィットは、「東洋と西洋との抽象的区別は、神と世界と人間についての具体的理解全体に関わる問題である。神と世界と人間というこの伝統的な三分法が、本来は聖書の創世記による世界理解にもとづくものであることに気づく人はもうほとんどいない」と語る(571)。「西洋にとつて比較的他にして異質なるものといえは、昔でも今でも東洋である。未だかつて他にして異質なるものとの接触を持たなかった者は、自己が何であるかを知らないのである。」「自己への批判喪失は、自己を他者として見る能力、そして自己超出の能力の欠如に基づくのである。そのような自己区別の能力を得たことを亡命体験と私の五年間の日本の大学での教鞭生活の賜物と感謝している。」(572)とレーヴィットは回顧している。彼の日本滞在は、ヨーロッパのキリスト教的に規定された歴史的共同世界を自覚化相対化させることになった。

レーヴィットは「日本という国は外国人にとつて、自分達の長く習慣としていたこととは逆をゆく世界である」(579)ことを様々な場面で目にする。古代ローマ、ギリシャとあたかも「全く同様な」「自然のままの信仰、日常の自然の事物の神聖視」が今も現に生きていること、大小様々な自然の事物、動植物への信仰が彼の関心をひく。そして日本人の「生命の欲望からの解脱と生

命の軽視」、「自己自身が独立した個人としてあるのではなく、先祖と子孫との共同存在として、家系代々の中での父と子、親と子という関係としてある」姿から、彼は強い印象を受ける(580)。

「日本人が運命に対してとる態度」は、それが病気や地震のような天災であろうと、戦争や政治的事件のような人災であろうと「沈着冷静と従順」であるとも彼は書き残している。それは「誕生と死に對する我々と全く異なった態度」であると彼の目には映じた(581)。

● 2 和辻「風土」論との対比

ここで、レーヴィットの日本論を一旦離れ、和辻倫理学における「風土」論に少し目を転じてみたい。和辻「風土」論の構想は、彼自身のヨーロッパの旅(一九二七年二月出発―一九二八年七月帰国)の体験に触発されたことに端を発する。彼の「風土」論は、帰国直後の講義草案「国民性の考察」(B)においてまず具体化され、雑誌に分割掲載された後に、加筆され、一九三五年の「風土」人間学的考察」としてまとめられてゆく。和辻は自らの旅行体験に刺激され、また当時のマルクス主義の波及に對する批判を重要な目的としつつ、様々な国民性(Nationalcharakter)の擁護を意図し、「風土」理論を構想していた。和辻によれば、「風土」の現象は自然科学の対象としての風土ではなく、第一に主観・客観の区別に先立つ「志向的体験」であり(φ11)、さらに「人間の自

「己了解の仕方」(811)である。「我々は『風土』において我々自身を」、即ち個人的・社会的な二重性格を持つ「間柄としての我々自身を」見出す(814)。

この「人間の自己了解の型」として、和辻はあの風土の三類型——「モンスーン」、「沙漠」、「牧場」——を提示する。和辻は「モンスーン」型風土の特性を、自然の恵みの「受容」と自然の暴威の下での「忍従」と捉え、そこに日本の風土を含めている。

留学から帰国した和辻には、「日本の珍しさ」は際立って見え、日本人に「しめやかな激情、戦闘的恬淡」という国民的性格を見出し、その顕著なものとして「淡泊に生命を捨てること」、家族の全体性が個々の成員よりも先立つこと、家族的な「間」において利己心を犠牲にすることなどを挙げていることはよく知られている。

こうした和辻による日本的「風土」の性格描写は、異邦人レーヴィットの目に映じた日本人の世界観、死生感とよく似ていることは些か興味深い。そして、そのような符合以上に、和辻哲郎の「日本」発見とレーヴィットの「日本」発見とは、或るコントラストを成しているように思われる。和辻が『風土』において語る西方への旅は、最終的に故郷日本へ回帰する旅であり、自然と歴史的共同世界が一体化した「風土」の諸類型の発見、とりわけ日本的「風土」の自覚であった。それとは対照的に、ユダヤ人レーヴィットの旅は、ヨーロッパからひたすら東方へ向かい日本に遭

遇し、さらにそこを通り抜けていく旅であった。レーヴィットにとって「人間世界」は、そこに回帰することを保証されているような「間柄」的な故郷ではなく、個人を迫害し、苦難をもたらす世界に他ならなかった。

レーヴィットは日本を見出したことを一つの契機として、キリスト教世界を相対化し、和辻「風土」論とは対照的な、自然と歴史を切断する世界観宇宙観に向かっていく。「東洋と西洋の差異に関する覚書」と同年に発表された「世界と人間世界 (Welt und Menschenwelt)」において、レーヴィットは「世界についての最初にして最後の規定は、世界とは自ずから存在する全てのものの一にして全体であるもの (Das Eine und Ganze alles von Natur aus Seienden) ということである。」(1-296)と述べる。彼にとって、この「世界」は人間学的に把握し基礎づけし得る歴史的世界ではなく、「自然的コスモス」として捉えられている。この不動のコスモスに対して、多くの歴史的世界は生成と滅亡を繰り返す、苦難と波乱に満ちた、人間の造り出す相対的な諸世界に過ぎない。

本稿で詳細に取り上げることができないが、レーヴィットはキリスト教の創造説に端を発し近代以降にそれが世俗化人間化されることによって生じた歴史主義の思想全体を批判し相対化しようとする⁽²⁾。レーヴィットのこうした試みは、ナチズムの根源にキリスト教の近代化によってもたらされた人間学的世界観、歴史主義

を見出そうとする意味を持っているといつてよい。

しかし最後に、レーヴィットの到達した「世界」観に対しては、いくつかの疑問を投げかけておきたい。レーヴィットが峻別した「世界」と「人間世界」という二つの次元は、互いにどのように関係するのだろうか。この点に関してレーヴィットが明解な説明を行っているとは必ずしも言い難い。

またそれ以上にレーヴィットに問いかけるべき問題は、「個人」は、仮に世界を「コスモス」と観じることができたとしても、自らがミクロ的には人と人の「間柄」の、マクロ的には苦難に満ちた歴史の人間世界における囚われの身であることを何ら免れえないということである。世界を自然的コスモスと見做すことができるのは、苦難を耐え忍ぶ強靱なストア的「個人」か、はたまた幸運によって苦難を免れた「個人」でしかないのではないか。

人間世界を調和的な「間柄」や「全体性」としてのみ捉えようとした和辻倫理学に対して、レーヴィットの人間学批判が一定の意味を持つことを認めつつ、彼の「コスモス」の哲学及びそれを支える彼の歴史哲学批判、とりわけキリスト教批判を検討するという課題を残し、一旦稿を閉じることにした。

※レーヴィットの文献を引用した際、引用ページ数と共に、以下のよう
な記号を用いた。

・(IRM)…*Das Individuum in der Rolle Des Mitmenschen*. (Drei

Masken Verlag, München, 1928)

・(MLD)…*Mein Leben in Deutschland vor und nach 1933*～*Ein Bericht*. (J. B. Metzlersche Verlagshandlung und Carl Poeschel Verlag GmbH, Stuttgart, 1986)

・(I)～(R)…*Sämtliche Schriften* Band I～IX (J. B. Metzlersche Verlagshandlung und Carl Poeschel Verlag GmbH, Stuttgart, 1981～1986)

また、『和辻哲郎全集』(岩波書店、一九九一～一九二二年)からの引用は、巻数、ページ数を(10-203) (B1)等と示した。(B1)は「別巻」を意味する。

- (1) 『和辻哲郎とカール・レーヴィット——二つの「人間」存在論——』(『比較思想研究』第二十二号、比較思想学会、一九九五年)。
- (2) 清水幾太郎「カール・レーヴィット『共在人としての個人』」(『社会学雑誌』一九二九年十一月号、日本社会学会)。
- (3) 玉井茂によるレーヴィットの論文の抄録「ロゼヴィット『フォイエールパッサ』と獨逸古典哲学の終結」(『思想』一九三二年十月号、岩波書店)。
- (4) 柴田治三郎訳『思想』一九四九年九、十、十一月号(岩波書店)。
- (5) 前掲の『*Sämtliche Schriften* Band II』に収められている幾つかの日本論を参照。
- (6) レーヴィットは、西田幾多郎「形而上学的立場から見た古代における東洋及び西洋の文化形態」が示唆に富むものであったことにはしばしば言及している。
- (7) E. Höfner: *Skepsis und Theoria* (『文化』第二十三卷第一号、東北大学文学部、一九五九年)を参照。
- (8) Jürgen Habermas: *Karl Löwith's stoischer Rückzug vom*

historischen Bauwesens. (Merkur X VI Verlag Kiepenheuer & Witsch, Köln, 1963) のローヴァイット批判を参照。

(やくしま・よう、倫理学、東京大学大学院)